

『日本アジア研究』第9号（2012年3月）

在日朝鮮人社会の男尊女卑に抗して生きる ——ある在日コリアン2世ハルモニの語り（下）——

金沙織*・福岡安則**・黒坂愛衣***

ある在日コリアン2世ハルモニのライフストーリーの続編。

語り手の中村幸子（さちこ）さん（仮名）は、1935年大阪生まれ（初回の聞き取り時点で74歳）。9人きょうだいの5番目。戦時下で空襲がひどくなり、それなりに安定した暮らしをしていた大阪から、一家で姫路へ疎開。疎開後は、父親は失業対策事業で働き、家計を支えたのはむしろ、朝鮮半島文化のシャーマンである巫堂（ムーダン）となった母親だった。

幸子さんは、学齢期になると、日本の公立学校である国民学校へ通った。日本人の同級生たちから侮蔑語を投げつけられ、よく喧嘩をした。10歳のときに終戦、「民族解放」を迎える。日本の小学校をやめ、3歳上の兄とともに、同胞たちの始めた民族学校に通った。幸子さんの家は貧しかった。中学3年のとき、両親に「女は勉強せんでもええ」と言われ学校をやめさせられ、かわりに、近所で洋裁を習った。姉3人はみな19歳で結婚して、家を出た。長男である兄は、日本の高校を出て、日本の大学に進学。幸子さんは、「女は役に立たない」と言う親の言葉に、反発を感じていた。母親は巫堂の仕事で忙しく、幸子さんは、兄が結婚するまでのあいだ、兄の身のまわりの世話をしなければならなかった。それでも、親の目を盗んで映画館やダンスホールへ行くなど、青春時代を楽しむこともあった。なお、幸子さんの3番目の姉は、婚家の家族とともに「北朝鮮への帰国」をしている。

幸子さんは、21歳のとき、親が決めた同胞男性と見合い結婚。夫は、古鉄屋や土建屋などの仕事を始めるが、いずれも長続きしなかった。けっきょく、幸子さんが娘と弁当屋を始めることで、暮らしが安定した。2005年に、帰化により日本国籍を取得。

このライフストーリーでは、戦時中から戦後にかけて、日本社会の在日朝鮮人差別、そして在日朝鮮人社会の「男尊女卑」に抗ってきた生きざまが、豊かに語られている。

キーワード：在日コリアン、男尊女卑、ライフストーリー

以下に、在日コリアン2世のハルモニ、中村幸子さんのライフストーリーの続編を呈示する。彼女からの聞き取りは、複数回からなる。2009年9月17～18日と2010年5月20～21日には金沙織が聞き手となって、2010年8月11～

* キム・サジク、埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程2年，社会学。

** ふくおか・やすのり，埼玉大学教養学部教授，社会学。

*** くらさか・あい，埼玉大学非常勤講師，社会学。

12日には金沙織と福岡安則と黒坂愛衣が聞き手となって、姫路の語り手の自宅にて聞き取りをおこなった。とりあえず金沙織ほか「聞き手」となると述べたが、じっさいには、聞き取りの場面には、つねに、語り手の娘と孫が同席しており、わたしたちはむしろ、その場において耳を傾けることと録音することに集中していたと言ったほうがよいだろう。そのため、語り手の語りは、基本的に身内の者に語りかけるスタイルをとっており、とりわけそれが親族呼称に特徴的にあらわれている。たとえば、彼女は自分自身のことも「私」と言うよりも「おばあちゃん」と言うことのほうがはるかに多い点など。

上では「娘から見た巫堂の世界」に焦点をあてて語りをまとめたが、この下では、語り手自身の生活史を中心にまとめている。なお、そのタイトルを「帰化しても気持ちは朝鮮人」と予告したが、「在日朝鮮人社会の男尊女卑に抗して生きる」とした。

語りをまとめるにあたっては、語り手本人の希望により、名前は仮名としたほか、記述のスタイルは上でのやり方を踏襲している。

* * *

まじないで治った胎毒

私（おばあちゃん）はおとなしい子どもやったんや。言いよったわ、母親（おばあさん）、「ほんま、おまえはおとなしい、手のかからん子やった」いうて。その代わり、ちっちゃいときは胎毒がものすごかったな。昔、胎毒いうて流行ったやん。頭、バーッと、ごっつい膿んだりして。「おまえの頭の胎毒治すの、大変やったんや。病院行っても治らへんし。どないして治してええんや思うた」いうて。ほんならな、ある人がな、「陶器を割って、それを火で炙って毒消して、その子のでっぺん、十文字にキャッキョと切って、血を出せ」言うたんやて。私は覚えてへんけどな。髪の毛は伸ばされへんから、ずっと丸坊主みたいにしとったけど。ほいで、「そない言われたけど、親として、子どもの頭を十文字に傷いけて、血を出せいうて、できるか？『心を鬼にして、いっぺん、そないしたらええ。そないしたら、まじないで、出した血が毒を出すから』〔言われて〕そないしたんや。ほんなら、ギャーいうて泣いたんや」いうて。泣いてな、一時（いちじ）、ウーッとなったらしいんや。血が、ごっつい出たんやて。それしてからな、徐々に徐々に治っていったらしいんやて。「それで、おまえの頭、治したんやで。おまえの胎毒で、もうお母さん、どんな思いした？」いうて言いよったわ。

母親が帰国に反対

子どものときは、国民小学校に兄ちゃんと2人で通うた記憶があんねん。兄ちゃんはな、ええ格好して。帽子被って、半ズボンと、黒のスーツみたいなやつ。金持ちやないとそんなン、朝鮮のひとでいうたら、なかなかないやん。でもな、大阪におるときは、ええ格好したで、私ら。ほいで、兄ちゃんは黒の革靴履いてな、私と手繋いで行くんや。兄ちゃんと3つ違いやからな。ほんなら、軍国主義やから、学校が近付いて〔くると〕、「歩調合わせて！」いうて、みな並んで、ダッダッダッダーって行くんや。ほんで、私ら、やっぱり「朝鮮人の子や」いうていじめられるやん。先生もな、他の子は叩けへんでも、〔私らが〕

ちょっとミスしたら、もう、バーチバチ叩かれたもん。朝鮮人はすごいじめられたんやで。「チョーセン、ニンニク臭い」「朝鮮菜っ葉、クソ菜っ葉」いうて、よう言われた。子どもらが言うやん。そういうふうにして子どもらが叫びもって逃げて行きよった。「こらあー！」いうて私ら追わいまわったけどな。でも、仲のええ友達とか、言えへん子は言えへんやん。

〔8月15日は〕民族解放や。独立記念やん。そのときに、朝連がものすごい勢いになったんや。「日本の学校行きよんも、みな朝鮮の学校入れて、朝鮮の勉強させー！」いう運動が持ち上がって。ちっちゃい家を借りて、そこで朝鮮語を教えるんや。ほな、私も日本の学校入ってやな。「日本の学校なんか行くことない！」いうて。「朝鮮人、解放した！」いうて。そやから知っとうやん、ハングル。完璧なあれじゃないけどな、だいたい読むやん。

そないしよるときに、朝鮮人がな、勢いづいて、みな「祖国へ帰る！」いうことになったんや。帰国いうのは、北〔朝鮮〕違うで。韓国。みな、故郷は韓国やから。父（おじいさん）も母（おばあさん）も。ほんならな、母（おばあちゃん）が嫌やったんや。もう、絶対、帰りたくなかったんや。韓国の生活いうのは〔母にとって〕最低の生活。女は下の下で、女中みたいにな、姑に仕える。子どもに仕える。それしか〔ない〕。言うたら、男尊女卑いうんか。その時代を見てきとうから。なんやかんや言うて〔も〕日本の生活は、社宅で日本人と同じように生活してきとうから、朝鮮の生活みたいなんないやん。隣保でも日本人として認められてしてきとう生活があるし。ほんなら、父親（おじいさん）は、もう〔頭に血が〕のぼってもうて、「故郷に帰る！」いうて。故郷にはな、〔父の〕父親（おじいちゃん）は早うに死んどうけど、父（おじいちゃん）のお母さんがおるし、兄さんがおるし、弟がおるんや。ほんなら、母（おばあちゃん）は「帰りたない」、父（おじいちゃん）は「帰ろう」言うて、〔言い争いが〕すごかったんやて。

母（おばあちゃん）はな、「絶対帰ったらあかん」いうて〔神さんに〕言われとったんやて。神さんが「絶対帰るな。帰ったら最期やで」いうて。言われとう母（おばあさん）はとことん反対して、「〔そんなに帰りたければ〕あんたが先に帰れ」言うたんやて。母（おばあさん）は、荷物を先に船で送ったら、横取りされてな、なにもかも失くなった人がものすごい出たいうことを、聞いたみたいなん。〔それ承知のうえで〕子どもと自分（おばあちゃん）らが食べるあれだけ置いて、〔家財〕道具もみんな〔船に〕積んで〔父に〕持って帰らしたんや。むこうに姑（ははおや）がおるから、手紙出して〔荷物の引取りに〕行かしたらな、誰が盗っていったんかな、荷物が失くなってな。「なんにもない」いうて手紙が来たんやて。これで〔帰国を〕父（おじいさん）が諦めたんやて。〔それぐらい韓国は〕ものすごい遅れとったんや。植民地になっとったから。帰った人はもう、ものすごい惨めになっとんや。日本は、戦後、発展途上国やん。韓国は全然、遅れとう国やんか。そこへ「祖国や！」いうて帰って、何があるん？

かなわなかった姉の日本人との恋

終戦なったら、〔1番目の〕姉（おばちゃん）は挺身隊から、18か19のとき帰ってきた思う。帰って来て、ちょっと間、一緒に暮らしとったんや。昔は18や19いうたら、もう結婚さしよったからな。娘抱えとったら負担があれやし、

1 番目の姉 (おばちゃん) が 19 で結婚したんや。明るる年, 19 になった 2 番目の姉 (おばちゃん), また結婚させて。[相手は] 同胞や。仲人入って見合いう形じゃなしに, 親同士があそこがええここがええいうて家柄を調べて行かすんやんか。あのとき, 国が違う日本の人とかは絶対に, それこそあかんときやったからな。

1 番目の姉 (おばちゃん), ごっついべっぴんさんやったんや。真面目やし。そやからもう, 誰からも好かれて。大阪に挺身隊行くまでに, 軍需工場で働いたときに, 1 人, ものすごいええ人がな, 姉 (おばちゃん) [のこと] ごっつい好きやってな。日本のひとやったんや。朝鮮人やいうことを知って姉 (おばちゃん) に惚れた男のひとがおったんや。姉 (おばちゃん) もまんざらではなかったらしいんやて。たまにな, デート誘われたりしよったんや。昔はあんなんは絶対ダメや。[1 番目の姉が] ちょっとその人とデートするのにな, 真ん中の姉ちゃんが先に帰ったら怒られよったんや。娘やからな, 仕事に行って, 帰りは一緒に「ただいま」いうて帰らなあかんのに, [1 番目の姉が] ちょっと遅れたらな, ごっつい怒られよったんやて。「[姉ちゃんが] 『私は 1 時間残業や言うといてな』いうたりして [頼むから], 私, よう嘘ついたわー。『残業やったら, おまえも一緒にして, 一緒に帰ってこんと!』いうて, どんだけ姉ちゃんのために怒られたか」いうて言いよったけどな。「どんなひとやったん?」いうたら, [2 番目の] 姉ちゃんがな, 「男前のええひとやったで。もしあのひとと結婚しとったら, 姉ちゃんの人生も変わっとうかわからへん。やさしそうなええひとやったんや」言いよったけどな。

恥ずかしい思いをした卒業旅行

[民族学校は] 朝鮮語もやけど, 日本語もいれもって民族教育すんねん。そのときはなにも「金日成万歳」, そんなないねや。朝鮮の文字を教えるン。だんだん, 金日成の思想教育に入っていくんや。ほいで, 東京に朝鮮大学ができて。そういう時代やってン。

[朝鮮] 中学校のな, 忘れもせえへんわ, どんな恥ずかしい卒業旅行。[私は] 卒業旅行は行って, 学校 [は] 卒業してへんねや。卒業旅行, スカートの要るやん。あの時分やったら, 折り目のついた黒のスカートや。朝鮮のチマ・チョゴリのな。ほんならな, 他の子は, みんな, ちゃんと洋裁屋に縫うてもうて, ええスカート着てくるんやけど, うちのカネがないやん。ごっつ子どもが多いから。父親 (おじいさん) が [職業] 安定所 [の失業対策事業] で儲けるいうたらしれとうし, 女なんか学校行かすンだけでも大変 (あれ) やから。ほんなら, 昔な, おしめがあったんや。昔のおしめいうたらな, 白と黒のな, 浴衣地の布 (きれ) なんや。綿 100 [パーセント] で柔らかい。その浴衣地の布をな, あっちこっち行って, 日本の人から要らんやつ貰うたりして。その布, 柄 (がら) が 1 つやったらええで。いろいろ寄せ集めの柄やん。それをな, 母親 (おばあさん) が黒い染料買ってきて, 竈に火つけてやな, 白黒のおしめの布を一生懸命, 黒に染めるんや。私のスカートをこしらえるいうて。もう, 寝もせんとな, 染めたんや。[裁縫] 上手にすんねん, 母親 (おばあさん)。こう, タック入れてな。アイロンかけてな。[でも] 柄が違うねン。真っ黒に染まれへんやん。柄が浮き出るんや。まあ, 親も大変やったと思うわ。ちょっとカネ出したら買えるんや。ないもんやから……。私は「行くんや」いうて泣くし。お母さんにし

たら、最後の旅行や思うたんやろ。で、上はブラウスでええわけなん、普通の。そのブラウスもあらへんやん。ほんで、母親（おばあさん）がな、ブラウスをこしらえてくれたんや。上手にな。前だけな、スーツとな、タックを入れてな、こう、襟つけて。

それこしらえてもうたいうて、私は喜んでな、そのスカートと服着て、〔卒業旅行の〕前の日に学校に行くんやねん。何を持って行って、何を着ていくかという説明（あれ）があるから。ほんなら、同級生の子のどこへ行ったら……。その家は金持ちやったんや。ちゃんとしたブラウスにな、買った折りスカート履いて出てくんねん。そのとき、私、どんな恥ずかしい思いしたか。私のンは、柄違いの柄が入った黒のスカートやで。ピチーッとアイロンかけてお母さんしてくれるんやけどな、柄が違うから目立つやん。知らんひと見たら、ハイカラなスカートや思うか知らんけど。「〔お母さんに〕染めてもうた」とか言えへんやん。そんなもん、子ども心に恥ずかしい……。ほいで、学校に行ったら、私だけやったんや。みんな黒のええスカート着て。ええスカートは折りが細いんや。

大阪からこっち来て、なんにも、西も東も、助けの人がおれへんと、働いて、あんだけの子ども養うンやもん。そやから、「大阪あのままおったら、こんな思いしてへん」いうて、よう言いよったんや。なんのつてもなしに姫路（ここ）へ来てな、ここまで子ども育ててしていこう思うたらな、大変やったと思う。

大阪におるときに、所有地（とち）があつたんや。60坪ぐらいの畑でな。そこで、いろいろ、玉蜀黍（なんば）も採ったりな。とうがらしとか。ほんで、ケイッパリ（ごまの葉の醤油漬）とか韓国の料理〔を作った〕。韓国のな、白菜や菜っ葉や芋やらな、いろいろこしらえよったからな。〔父に〕付いて、その畑へよう行ったことがあつたんや。ところがな、父親（おじいさん）も字知らん。世間知らずや。仕事だけして。その土地、父（おじいさん）の元の〔名前〕でな、登記をしておいたまま、疎開やいうてこっちへ逃げて来た。すっかり忘れて、思い出したときは、もう遅かったんや。それ、兄ちゃんが高校行きようとき言いよったわ。〔父が〕「大阪に畑があつたんやけど、どないなつたやろなあ？」いうて。兄ちゃんが「えー？」いうて、役所で調べたら、時効になって、もうあかんかったんや。市のもんになつとン。その近所に花屋のおっちゃんがおつたんや。お父さんともものすご親しい人。市役所の人はずっと持ち主を探してな、近所の人に「この持ち主、知らんか？」いうて何回も来とつたのにな、「あれ、新井さんとこの畑や。新井さんどこ行ったかわからへん」いうて言うたんやけどな。昔は市もええ加減やんか。ほいで、もう、どないもできへんかった。あれさえ生きとつたらな、ほんまに一財産できとんや。あのとき、ごっつい〔土地の〕値が上がりようときやったやろ。あそこ、新幹線の新大阪の駅近くやから、買収されて全部立ち退きなつたから。

朝鮮中学校を中退して洋裁学校へ

私（おばあちゃん）、頭がよかつてな、朝鮮の学校でもな、1、2を争うとつたんや。負けず嫌いやから、2〔番〕に落ちたら、絶対今度1〔番〕になるいう気持ちになってな、勉強しとつたから。ほいで、絵も上手やったんや。運動も好きやった。バレーボールもしたりな。走るんも速かったんや。リレーの選手に選ばれたりしてな。私（おばあちゃん）は、ほんまに、スポーツ万能やったん

やで。ほんで、兄ちゃんもおなじ朝鮮の学校行ったけど、中学校卒業して日本の高校へ入ったんや。そっから大学へ行ったんや。

〔私は〕中学校3年生〔の途中で学校をやめさせられた〕。「女は勉強せんでもええんじゃ。学校やめ！」いうのを「嫌や。学校行かして！」いうて泣いてな。〔でも〕行かしてくれへんやん。私、明けても暮れても家で本読んどったんやで。ミステリーの本とかスパイもんとか、あちらの文庫本、隠れて本読み。〔それをまた〕怒られて。

〔両親とも学校に行くのに反対したか、やって?〕そうや。母親(おばあさん)、自分が韓国でな、字を教えてもらわれへんかったやん。「女は勉強せんでもええ」いうて。金持ちの家はみんな勉強さすんやけど、〔うちは〕金持ちちがう。両班(ヤンパン)とかは、みんな、女の子〔にも勉強〕さしよったやん。ところが、両班でも、われわれはもう、ほんまに、貧乏の両班や。両班で金持ちやったんが、さびれて。祖父(おじいさん)が身上潰したんや。ほいで、なんにもなしになって、苦勞(あれ)したから。

ほんで、〔朝鮮学校〕やめさせられて、本ばかり読んどって。そないしよったら、近くに洋裁学校いうのンができてな。普通の家で洋裁しようひとが、生徒として教えよったんや。そこへ行かしてくれたんや。「洋裁も学校のひとつや」いうて。「洋裁やったら習え。女のすることや」いうて。

ところが、そこ行くいうたって、実技の布(きれ)があらへん。買うてくれへんやん。〔そやから〕そこらの着物とかみなほどこいたりしてな。——昔、大阪〔で〕姉ちゃんらがみな着物着とったから。お嬢さんやったんやで、みな。それを私(おかあちゃん)がチョゴリにしたりチュメにしたりしてな。あの時分、解放されたから、朝鮮の民族衣装が流行ったから。そないしよって、まあ、ちよっとだけ洋裁習うたんや。

そないしよるときに、兄ちゃんがな、大学入ったんや。理工科に入ったもんやから、実験するのに、「白衣をこしらえてくれ」言うわけ。買われへんから。ほな、先生に言うたら、「布があるんやったら寸法測ってきな」いうて。ほんなら、お母さんが、糊付けした綿100の薄一い布をな、買うてきたわけや。兄ちゃんのことやから。ほんで、「これで白衣こしらえたれ」。で、寸法測ってこしらえたわ。それ、喜んどった。あの時分、私(おばあちゃん)の年代は、みな、洋裁した。洋裁な、2年ほどしか行っていないと思う。それも、休んだり行ったり、休んだり行ったりして。〔そのあと〕編み物も習うた。19歳まで。

兄ちゃん、大学2年生のときに結婚したんや。〔それまでの〕2年間、どんだけの目に遭うたか。「おまえら女5人たかっても、男1人の役にも立てへんのンじゃ」言われて大きくなったからな。〔それに対しては〕反発したわいな。起きてけえへんかったわいな。朝4時ごろ、2階で寝とんのに、「さっちゃん、さっちゃん」って〔お母さんが〕呼ぶやん。兄ちゃんが起きて、京都の学校へ朝一番〔の汽車〕で行かなあかんやん。ご飯ごしらえしてやらな。弁当してやらな。ほんで、服みな出してやらな。もう、お母さんはしんどいわな。遠いところ行って、身体を粉にしてやな、〔巫堂の〕ドンドコしてやで、帰ってきて、そんなもん、起きてでけへんやん。〔だから、するのは〕私や、みな。

結婚してお母さんとこ行っていろいろ昔話したら、よう言いよった。「おまえを起こすの、わしはあのとときどんだけ嫌やったか。早よ嫁さん貰うてな、嫁さんに任したい思うた」いうて。『さっちゃん、さっちゃん』いうて呼んで

も、おまえ、起きてけえへん。汽車の時間はあるし、兄さんの弁当こしらえて、ご飯食べさして行かさないあかんの、起きてけえへんし……」。私、いまでも耳にそれ残っとるわ、ほんまに。ほんで、大学2年生のときに見合いで結婚したんや。22歳のとき。[私が] 19のときか。嫁さん来て、私は、やれやれ、解放された。

親に隠れてダンスホールへ

お母さん、ドンドコ行ったら[なかなか] 帰ってけえへん。朝早よ出たら晩に帰って来たり、ちょっとそこに拌みに行ったら夕方帰って来たりする。行くときは必ず、「明日やないと帰れへん」とか、「晩に帰る」とか、私と義姉(ねえ)さんに言うて行くやん。ほんなら、「泊まりや」言うたら、義姉さんとコソコソ打ち合わせして、映画行くン。もう、あの時分、娯楽は映画や。前は芝居小屋やった。

私はな、こない見えとつても、飛んでたんや。ダンスが好きでな、ダンスホールへ隠れて[行っとつた]。姫路にダンスホール屋があったんや。1枚[券を買って]先生1人ついてもらうダンスホールへ通うたんや。あのな、真っ黒のな、ピロードのロングのフレアの入ったスカート、ちょっとロングめのが流行っとつたんや。そのドレス、自分でこしらえて。私(おかあちゃん)背が高いし、ウエストは、まあちょっと締まっとうから、よう似合うやん。で、そこ行くいうたら、そのロングドレス着て。小遣いで、こっそり内緒でひとりで行ったんや。私(おばあちゃん)な、おとなしそやけど根性あったんやで。ほんでな、椅子ずらっと並んどう[とこに]、こう、座ってジューとおるんや。みな、踊ってってんや。ほんなら、男の人が来てな、こうして手あれするやん。ほんなら、「初めてです」いうて、スロースロー、クイッククイックからな、習うんや。男の人がリードして。足の通りにな、男の人についていたら踊れるんや。で、足、男の人が引いたら、前行って、前来たら後ろへ引いてな。こう、男の人に手かけるんや。ぺちゃっと掛けへんと、こういうふうな[ふわっとした]掛け方かな。

ちょっと通ったんやけどな、ジルバを習ういうときにな、ばれそうになってやめた。なんでいうたら、帰ってけえへんはずのお母さんがな、急に仕事が早う終わって帰って来たんや。ほんなら、兄ちゃんがな、「わしの用事で言った言うてくから、早よ帰れ！」いうて。——[それまでも]何回[も]締め出しくうたで。義姉(ねえ)さんと打ち合わせしてやな、「私が今日行って。こんどは義姉さん行かしたるからな」いうて、留守番交替。そないしてやな、私が行っとうときに、お母さん帰ってきて、「どこ行ったんや？」いうて。「映画行った」言わなしょうがないやん。[当時は映画行くのも]あかんかった。許しが無い限りは、絶対にあかん。女の子はそんなとこへ[行って]遊びまわったらあかんし。ごっつい締め出しくうてから、義姉(ねえ)さんがこっそり開けてくれて。そいでも、見つかって、髪の毛ひっぱりまわって、怒られてすごかったもん。そういう時代を送ってきたんや。それでも、なんやかんや言いもつてもな、兄ちゃんが嫁さんもうたから、青春時代をちょっとな、こっそりと隠れもつてな、義姉さんと兄ちゃんと一緒にうまくエンジョイしたわけや。

そのとき、19、20歳のときに、1人友達がおったんや、近所に。朝鮮のひとやけどな。私とものすごい無二の親友やねん。その子と、ちょいちょいな、隠

れて映画を観に行ったからな。そのあいだをぬって、アルバイト見つけて仕事しに行ったんや。ケーキこしらえる会社もちょっと行ったんや。大きい絨毯編む工場にも行って。キャラメルこしらえる会社にも行って。いろんなことしたで、小遣い稼ぎにな。

朝鮮人であることを嫌だと思ったことはない

〔うちの食事はどういうものやったか、やって?〕母親(おばあさん)らは、日本の料理よりも朝鮮の料理が好きやんか。ほいで、法事するときは朝鮮料理やんか。その合間ぬって、日本の料理とかいろいろ混ぜ合わせて。まあ食べもんあらへんやん。漬けもんに魚に大根の汁とか。ほいで、麦ご飯に大根刻んで一緒に入れて炊いたり、玉蜀黍(コーン)を入れて炊いたり。雑炊とか。終戦後、そんなんしか食べもんあらへんやん。間食するもんはなんにもない。お腹ふくらすいうたら、三食〔の〕ご飯しかない。それも麦しかないしな。麦ご飯に米がパラパラと混ぜととうぐらいのんしかない。ダシもなんにもない。醤油だけで、菜っ葉の汁こしらえて食べる。もう、ただお腹をふくらすような生活しかできへんかったやん。

〔外国人登録の指紋押捺は〕もう自然やった。なんとも感じひんやん。私らな、日本で生まれて、日本の教育受けて、日本の生活してきとうからな。朝鮮人やいうて差別(あれ)されたことは記憶にある。で、戦後な、「朝鮮がどないしたんや!」いうて喧嘩したこともあるで。〔でも、自分が朝鮮人いうことを嫌やとは〕感じへんかったなあ。私らの子どもらが嫌やったんやろうけど、私らはもう、まわりに流されていったと思う。私らの世代はな、時代に自然とな、流されて、こんなもんやいう意識(あれ)で大きくなってきとうから。ほいで、ものすごい陰湿ないじめいうのにも遭うてないんや。というのは、その、環境やな。まわりのひとも、朝鮮のひとやいうことわかつとも、親自体が馴染んで、なんの隔たりもなく付き合いしとうもんやから。日本のなかへ溶け込んだ生活してきとったから。

だから、姫路(こっち)へ来てもな、新井さんいうたら知らんもんおれへんやん。ほいで、そこへまた、兄ちゃんがものすご社交性があるし。父親(おじいさん)も社交性があったから、〔職業〕安定所〔の失対に〕行って、日本人であろうが朝鮮人であろうが、みな友達やねん。

親の勧める見合いで結婚

3番目の姉ちゃんも19で結婚さしたんや。「〔姉2人は〕長男〔のどこに嫁に〕行かしたから、ものすご苦労しよう」いうてな、3番目の姉(おばちゃん)は次男へ行かしたんや。ところが、次男は次男なりに苦労する人にあたって、長男ができたときに、私がここの夫(おじいちゃん)と見合いさせられたわけや。

父親(おじいちゃん)が終戦後になって、安定所へな、行くようになって。1日行ったら判子押してもうて。それがいっぱいになったら安定所からおカネをくれるんや。その安定所でな、行きよう人の紹介で、「お父さんがものすごええ人やから息子は間違いないやろ」と。「その息子は働くン嫌いで、『商売、商売』言いよう息子やから、商売する人はええんちがうか? 商売の才覚ある人はええ」いうことでお見合いさせられたわけや。ほんで、「長男の家行ったら、竈の灰までおまえらのもんになる。次男〔とこ〕行かしたら財産なんにもない

けど、長男は食いはぐれない」いうことで、私（おばあちゃん）も親の言いつけで夫（おじいちゃん）と一緒にあったんや。

私はな、見合いするまでいっつも言うもったんや。私が背が高かったやろ。「背の低い人は絶対嫌やで！」いうて、ずーっと言うもったんや、母親（おばあさん）に。ところがな、一番背の低い夫（おじいちゃん）があたったんや。ごっつい背低いやん。嫌やったんや。ほんなら、3人の姉ちゃんが「なんで、あんな背が低い、さっちゃんより背が低いのに」[いうて]反対したわけや。ほんならな、母親（おばあさん）はな、「背が低いで〔縁談を断って〕食べていけるんか！」「顔が男前ちがうからいうて〔断って〕生活できるんか！」とかって。昔、そない言うやん。「目が片一方（かたいっぽ）なかつても、食べるんに不自由なかつたらそれでええ」とか言うひとやん。ほんならな、3番目の姉婿が、「あそこは、息子は知らんけど、お父さんは間違いない。わしは一緒に仕事したけど、あのお父さんはものすご真面目なええ人や」いうて保証したわけや。昔は親見るんや。「娘婿はお父さん見て選べ。嫁は母親見て選べ」いう昔からの諺があんねん。ほんでな、「ええ」いうて見合いしたわいな。

夫（おじいちゃん）と見合いしたときは、[私は]ただお茶持っていって、むこうが[私の]顔見るだけで、しゃべれへん、あの時分。上の姉（おばちゃん）ら2人[のとき]も、ふたりは顔見いひんねん。男が見て帰るだけ。男が[家に]来て座るやろ。今でこそ対面（こう）やから見えるけど、昔は段降りて、むこうのほうに台所や。そっからお茶持ってこさすねん、お母さんがな。お茶だけ置いたらスッと行くんや。そのとき男が女見るだけ。女は見いひん。それが見合い。ほんで、男が「ええ」言うたら、親同士もよかつたら、オッケーで、すぐに3ヵ月以内に結婚式挙げるわけ。私（おばあちゃん）はな、1番目の姉（おばちゃん）やら2番目の姉（おばちゃん）やら3番目の姉（おばちゃん）が、「絶対に19で行かしたらあかん！19で私ら行かしたから、みな苦労しとう」言うて[反対したから]、19は避けて21で結婚。

ひとつ[姉さんらと]違うのはな、「3日目にもう1回会わそか。見るだけじゃあかん」。仲人さんが[そう提案した]。やっぱり、戦後の風潮（あれ）やな、開けてきとんやな。夫（おとうちゃん）やったって「もう1回会いたい」言うわな。ほんなら、[親が]「行ってこい」言うわけ。で、嫌やったんや、会うんが。恥ずかしいやん。男の人とデートというの[したこと]ないもん。籠の鳥で大きなたうもんな。もう難しい家で、「女は門にも立つな」いうように大きなたうから。母親（おばあさん）、ものすご厳しい人やったから。ほんで、姉ちゃんらが「おまえ、行ってこい。おまえは、デートしよ言うからええやんか。行ってよう見てこい。話ししてこい」言うわけや。

ほんなら、デートやって[夫が]来たんや。なに乘って来た？ 運搬車。うしろ荷物積む自転車こいでな。まあ普通のスーツ着てな、来たわけや。「どこ行くんですか？」いうて聞いたんや。うしろへちよんと乗ってな。近くですりゃええのに、[少し離れたところに]昔ハイカラで喫茶店ができとって[そこに行った]。夫（おじいちゃん）なんか、外に仕事しまわってしとうから、遊び慣れとったわけや。25歳で、遊び盛りの男やから、そういうところも出入りしよったんちがう？ 私ら女は喫茶店知らんやん。お茶飲むいうことも、珈琲（コーヒー）飲むいうことも知らんやん、あの時分。貧しい家で大きなたうで、厳しい親のところで育つたうから。で、[女給さんが]「はい」いうて珈琲だしてき

たんや。もう、忘れもせえへんわ。昔の珈琲いうたら角砂糖が出てきた、2つ、ちよんと。もう、恥ずかしいで、なんにもしゃべれへん。飲み方知らん。ジューツとおったらな、[夫が] 砂糖入れてな、かき混ぜて、「ミルクいりますか？」というて言いよった。「はい」[言うたら] ミルク入れて。そのとき初めて、こないして飲むんやなと覚えた。ほんならな、私が恥ずかしいんやろ思ったんか知らん。「出ましようか？」言うさかい、「はい」言うて。半分も飲みもしてへん。また運搬の自転車のうしろにな、なんかちっちゃい座布団みたいなン敷いて来とった。そこにちよんと横乗りして、タッタカタッタカと、こう……。[夫は] どうも自分の友達を別のテーブルに呼んどったらしいんやねん。自分が行きつけの喫茶店、そこへ[友達を] 呼んどうのために、わざわざあんな自転車ですこまで行って、また送ってくれるわけや。

[家に] 行きしなに、夫(おとうちゃん)の言うたことがある。[午後の] 3時か4時ぐらい。「僕はきょうだいの多いし、苦勞すると思う。そやけど、僕が守っていくから来てくれますか？」って言うから……。えらい、夫(おとうちゃん)洒落(しゃれ)とったんや。それでな、「はい」言うたんや。自転車で帰りようとき。それで決まったわけや。あとで聞いたことやけどな、結婚してから長一いこと経って。「ちっちゃい嫁はん、嫌やったんや」て(笑い)。

仕事が長続きしない夫

そういう経緯(あれ)で夫(おじいちゃん)と結婚したんやけど、なんにもないどん底の生活や。最初からもう、苦勞しとうもん。なんでいうて、[家財道具は] みんな質屋流れのやつ買うてきとん。結納いうたってあらへんやん。夫(おじいちゃん)は[同胞の友達] 高山のおっちゃんと15のときから仕事しに、飯場まわりしておカネ稼いで家に入れよったひとやから。もう、ものすごい、私の家より婚家(ここ)は貧しかったんや。なんでいうたら、舅(おじいちゃん)1人だけしか働いてへんやん、[職業] 安定所[の失対]で。それに[きょうだい] 何人おるん？ それもな、結婚した後でわかったんや。結婚するまで「男4人、女1人や」言いよったんや。ところがやな、男6人。2人ごまかされた。結婚してみたら、中学校2人、小学校3人、ほいで[もっと小さい] 妹がおる。[私は] 自分がきょうだいの多いから、[きょうだい多い人と結婚するのは] 嫌や思うとったんや。

[結婚した当初、友達] 高山が「トラックをかうて砂利運搬しよう」[いうて夫を誘ったんや]。トラックかういうたら、カネがなかったらできひんやん。ところが、高山の父親(おじいさん)は、「息子がトラックかうて仕事するんやったら、わしがかうたる」いうて、息子のためにトラック1台かうてやったんや。夫(おとうちゃん)も一緒にしたかったけど、そんな到底、一銭もカネないやん。「親にカネがないからトラックのトの字も買われへんかったんや」。そない言いよったわ、夫(おとうちゃん)がな。そこが運命の分かれ道で、もう、あのかの砂利運搬、ものすごいやん。高度成長期の日本やから、なんぼでも要るんや。ほんなら、[高山は] 出世しだしたやん。

夫(おとうちゃん)は自分でなんとかかせないかんから、自転車運搬車に箱を乗して、鉄拾いな。昔、みな拾い屋やったやん。自転車で各家、鉄買いに走りまわるねん。それをかうて溜めた人が、ボーンと売ったら、ものすごカネになるときやったやん。[近くに] Mさんいうひとがおって、そのひとのお父さんが

カネ持っと思ったから、持ってきたやつを買って溜めて売ったりしてから、ものすごい金持ちになっていきよったとこや。夫（おとうちゃん）がそこへずーっとな、拾って持って行ってしようときに、そのひとが「ちゃんとした土地を確保して古鉄屋せえ」いうて言うてくれたんやて。「わし知っとう人がおるから、その人に土地借りて、ちっちゃい掘っ建て小屋建てて、そこで古鉄を集め」と。そこ、トラックがものすご通りよったんや、番線とか鉄とか積んで。ほいで、「みな小遣いするために、運転手がちょっとずつ横流しするんが、あそこやったらごっつい入るで」いうて、ええこと教えてくれたんやて。ほんで、そこへな、掘っ建て小屋建てた。ちょうど長女（おまえ）が生まれて、1歳か2歳なるときやったんや。そこでジューとおったら、みな拾い屋が持って来んねん。なんでいうたら、日本が高度成長期にあるさかい、もう鉄とかあんなものすごい必要やからな。新聞見たら、一日一日、鉄〔の値段〕が上がるんや。新鉄とか銅とか、みな別々にして溜めといて、新聞見てな、バーンと上がったときにバツと売ったりして、みな儲けよったんや。

1回な、長女（おまえ）を自転車に積んでやな、見に行ったんや。ほんで、夫（おとうちゃん）がちょっとおれへんとき、「留守番しとけよ」言うやん。教えてもうてへんからさっぱりわからへんねん。ほんなら、隣の自転車屋のおっさんがよう知っと思ったんや。夫（おとうちゃん）離れるときにな、「ちょっと見とって」言われて、「これはなんぼ、なんぼ」いうて買いよったらしいんや。ほいで、〔夫が私に〕「ちょっと行ってくるさかい、店、留守番しとけよ」いうて。「店の留守番いうて、どないするん？ 私知らんのに、なにをなんぼで買うか。売りに来たたらどないするん？」言うたら、「隣のおっさん呼んたら教えてくれるわ」いうて。ほんで、ちっちゃい、3つぐらいやった長女（おまえ）を〔子守りしながら〕ジューと待っと思ったらな、ちょっと間おったらな、ものすごい長いトラックが、新鉄の番線をいっぱい積んで停まるんや。ほんならな、「おやっさーん」いうて来るんや。自転車屋のおっちゃん呼んで、「すいません。あの、売りに来たんやけど、どないするんですか？」いうて。ほんなら、バーンと下ろしていきよったんや。

それを3年ほどしとったのにな、横着（おうちゃく）はな、あかんねや。ごっつい儲けよったんやで。そないしとうときに、ある日……。〔夫は〕酒が好きやろ。店閉めてまっすぐ酒飲みに行って。露店で飲みよって、喧嘩になって、相手をポカンポカンにいわして。酒癖悪いんや、夫（おとうちゃん）な。〔警察に〕捕まっとな。なーんぼその日、待っても帰ってけえへんねん。その自転車屋に聞いてみたらな、「帰った」言うんや。どこへ行ってもどこで聞いても、夫（おとうちゃん）帰ってけえへん。ほんなら、明くる日の朝や。電話かかってきて、「警察です。捕まっとうから、面会に来たってください」。「えっ！」いうて。——私は結婚して、こないに堅い娘が、あらゆること経験した、この中村家で。兄弟喧嘩はするわ。酒飲んで親子喧嘩はするわ。——ほいで、〔面会に〕行ったんや。で、バンドは外されるんやな。〔夫が〕「出してくれ、出してくれ。早よ出してくれ」いうて。夫（おとうちゃん）な、喧嘩してな、指を怪我しとんや。ポコーンと、もう、指先（ここ）あらへん。治療してもうて、なんか巻いとったわ。「指、怪我したんちがうん？ ほんまに。酒飲んで！」いうて。

そないしよって、1週間ほどして出てきたんや。それから仕事するかいな。もう、雨やいうたら休み。自転車屋（むこう）から電話がかかって、「おっさん、

おれへんのん？ 品物(しなもん)売りにようけ来とうで」いうて[言われたら], そのときは行く。また晩, 一杯飲んだら, 明るく日は起きひんやん。それで, 「あんたがせえへんねやったら, 私が商売する。自転車乗って子ども連れて行って, そこで商売するから。[あんたは私に商売のやり方] 教えてくれたらええから」言うても, それもさしてくれへんかったんや。そないしよううちに, O さんいうて自分とおんなじに買い子しよった人がどんどこどんどこ大きくなって, ものすごい大きくなったやん。もう, ころらで 1, 2 を争う寄せ屋になったんや。こんど, 夫(おとうちゃん)がそこへ売りに行くようになるわな。あの人は, まあごっつい出世してな。やっぱり夫(おとうちゃん)は才覚がないんや。ほいで, 横着。目の付けるところは早いんや。他人(ひと)より一番にすんねん, なんでも。ところが, 一番にやめるんや。

そないしようときに土建はじめたんや。丸井住宅いうのンがあつて。[ある日] B さんいうて丸井住宅の偉いさんやった人が一級建築士の男の人 3 人連れてな……。[うちのひと]が「中村組」いうて土建屋しよったから, なにかで見たんちがう？ 夫(おじいちゃん)とこ来てな, 「姫路で丸井住宅の支店, あんたどこへ仕事をやるから, してくれ」つて。[そんで] 丸井住宅の元請けで, 土建したんや。関西へ来た丸井住宅の最初の元請けしたんは, 夫(おじいちゃん)が初めてやったんや。それでな, その人に習うて, 一緒について基礎ごしらえをしよったんや。ずーっとそれで稼いでしてきとつて, うちとこが運がつきだしてな, ようなってきたときに, 「神戸で住宅をこしらえるから, 神戸で飯場はつてしよう。わしらがみな[準備]するから」いうて[誘われた]。そないするまで, あの人ら, 家で寝泊まりさしとったんやで。ええ技術者が来てやな, [夫を] 助けてやな, 一緒に仕事してくれてたんや。神戸へ飯場はつて一旗あげたら, 「中村組」が丸井住宅の元請けの偉いさんにもなつとんにな。「行きいなー。飯場はつてしたら？ 丸井住宅の元請けいうたら, ほんま, あんただけやで。ここまで B さんらがしてくれるんや」いう私のアドバイスを悉く断つて, 「そんなとこへ行ってわしひとりでようせん」言うてやな, やめてもた。ほな, もうあかん思うたんか知らん, この人らもな, 自然と離れて行ってもて。

ほんで, こそこそとな, よその拾い土建しもつておつたんや。そのときにな, そんな[建設業関連の] 勉強さすために, [3 番目の弟の] K を大阪の専修学校入れて。学校出したら自分の手足になってくれるやろ, 技術者として連れて歩こう思うたんや, ちょっと一緒にしよった思つたら, 追突で鞭打ちなつたいうて, 1 週間も 2 週間も入院してやで。どないもないのに。それで, 「兄弟あてにしとったけど, K まであんなことする」いうて, K とも別れてもうたんや。それで土建屋やめて。ほんならすることないやん。どん底や。

そないしよつたら, 2 番目の姉婿(おっちゃん)が, 城田鑄鉄いうとこへ車で古い鉄を運ぶ仕事しよったんや。[夫が] 仕事がないのを見てな, 紹介してくれたんや。「トラック持とつたらなんでもできるから, 中古のトラック 1 台もつて仕事せえ。そこへ入れたるから」いうて。ほんで, 城田鑄鉄へトラック乗って運搬しよつたら儲けよつたんや。まあ生活ができたんや。ところが, それも嫌気さして, 「トラック乗って, わしはあんなとこへ行ったり来たりな, 車が怖いから嫌や」言うて。アッハッハッハッハ。根性もないねん。やめてもうたんや。[義兄さんは]「せっかく紹介してもようせん。あんな横着, どこにおる？」いうて。

そないしよつたら、夫（おじいちゃん）がな、金融屋をはじめんねや。〔当時はまだ〕金融屋がポツと出たとこなんや。それも高山のおっちゃんの紹介で。「いま、サラリーマン金融がごっついええぞ。大阪へ研修に行け」というて言われて。もう、おっちゃんも夫（おとうちゃん）のこと、遊んでて生活が困るということわかっとうもんやから心配してくれたんや。きょうだい以上に心配してくれて。ほいで、大阪行きよつたわ、2日か3日ほど。〔高山から〕「どこにも出んでも家でできるやつ。おまえとこ広いから」〔いうて勧められたんや〕。

〔私が〕38歳のときに、夫（おとうちゃん）41か2のときに、長男が生まれたんや、遅一いに。〔それまでは〕「わしは家建てへん」と言いよつたんや。「娘（おんな）ばっかりやのに、家建てて、誰が跡継ぐんや？」言うて。夫（おとうちゃん）もちよつと古い頭やな。そない言いようときに、長男ができた思うたら、「家を建てる」というて言いだしたんや。ほんで、長男が1歳のときに家建てたんや。建ててから〔家の〕裏でな、金融屋の看板、「丸中商事」というて揚（あ）げたんや。おっちゃんの言うとおりに研修行って来て。ほんならな、またな、トットコトットコ客が裏から来てな、しよつたんや。ほんなら、みんな賢いやろ、あっちゃやこっちゃやサラリーマン金融屋が出だしたんや。そないしよつたらな、3年目にやな、自分の弟が金融屋しだしたんや、近くで。それで嫌になって、金融屋、ポツとやめてもうたわけや。ほんで、もう無収入。たちまち困ったんや。

女だてらに弁当屋を始める

それで、私（おばあちゃん）は、働きの出だしたんや。食べるもん、家なんにもないし。朝働き、昼働き、晩働き。ちよつとだけ寝て、また朝働き、昼働き……。ホテル行って働いて、レストランで働いて。そのとき、〔うちの〕冷蔵庫になんにもなかったと思うで。〔ご飯を〕塩つまんで醤油と食べたときが、なんぼでもあったやろ思うんよ、子供（おまえ）らな。そないしよつたときに、チェーン店の弁当屋が、姫路に1号店ができるということで、「1号店の店長になってくれへんか？」ということで、そこで働きよつたんやけどな、最初の契約通り給料くれへんかった。暇やったから、店が。ほんで嫌になってやな、辞めてもうたんや。3ヵ月もせんうちに。辞めたら忽ち仕事ないやん。すぐに2号店ができたんや、そのあと。ほいで、そこで一生懸命働くやん。私（おばあちゃん）の気性やから。ほんなら、〔あるとき〕「商売したいんや」と言うたら、そこで一緒に働いとったおばあちゃんが、「中村さん、〔自分でチェーン店を〕出したらええんちがうか？」というてな、こっそり言うてくれたわ。その足で帰って来て、「あんた、商売したいんやけど」というて〔話したら、夫は〕「こんなもん、おまえ、弁当1個10円20円の商売して、1日に100人来るんか？50人来るんか？」言うんや。そやから、「もう、なんでもええから、おカネ貸して。するから！」というて。ほな、次女がな、「お母ちゃん、商売するんやったら私が一緒にしたるから〔店を〕探しい」と言いよつたから、「そないするわ」というて。

ほいで、母親（おばあさん）とこ行って、「生活には困るし、商売しよう思うんや」というて〔相談した〕。ほな、「2、3日のあいだに決まると思うから、そんなに慌てるな」というて言うてくれたんや。「神さんはそない言いようから、2、3日おってみい」というて。〔せやけど〕気が急（せ）えとつたから、帰ってくるなりあっちこっち電話してな。ほんなら、〔夫が〕「わし昔からよう知っとうん

動産に、いっぺん聞いてみるわ」いうて、電話、ポンと入れたんや。ほんなら、「店3軒ほど空いとるわ。見てみるか？」言うから、すぐ飛んで行ったんや。ほんで、3カ所見たんや。私が先見て、本部の専務も常務も、呼んだら来て。こんど母親（おばあさん）に「お母さん、ちょっと店観て」いうて、観てもうたんや。3番目にいまの店になったら、母親（おばあさん）、「ここせえ。ここで儲けるはずや」言うたんや。私の気も「ここや」言うし。ほんで、すぐ決めたんや。手付金、打たなあかんねん。〔夫が〕「おまえ、店持つのになんぼ要るんや？」いうて。「最低限650万か700万要るんや」「そんなカネあらへんがな」いうて。650万のカネが30年前のあの時分でどこにあるん？〔夫に〕「〔高山の〕にいさんに言うたら？」いうて。ほんで、〔夫が〕高山に言うて。ほんならな、「わしが保証人になったからおカネ借りてさせ。おまえも手伝え」って言いよったらしいんやて。ほいで、朝銀の保証人になってくれた。

オープンした思うたら、すごい忙しかったんや。私、泣いたで。ほんま、うれし涙に泣いたで。もう、忙しいて。1日に30万も40万も売れるいうたら、ものすごいやん。弁当屋がなかったから、みな買いくんねん。日本のひというたら弁当好きやん。おにぎり好きやん。ほんなら、いろんな子ども会から何百いう注文がある。そういうことで、ここまで来たんや。

北に帰った者、留まった者

北朝鮮の受入れが始まったんや。私らは行く気なかったよ。「〔地上の〕楽園」とか言われとったけど、故郷は韓国やんか。母（おばあさん）が言いよったんや、「帰るなよ」と。「北は寒いし、なんの資源もない。南は資源がある。なにを植えてもなにしてもやけど、北の人間はものすごいきついし。おまえら〔の故郷は〕北ちがうのに、何しに帰んの？楽園や言うけど、行ったら苦勞するで」と。母（おばあさん）ははじめから、行く気はさらさらなかった。〔でも、多くの人〕が信じて行ったんや。「衣食住保障する。月火水木曜日働いて、金土日は働かへんでも、子どもと年寄りも国が面倒見て楽な生活させてやる」と。ごっつい金持ちなんかも、ものすごい行ったやん。「仕事持って行ったらええとこで商売ができる。国に貢献できる」と言うて、みな行ったやん。

中村家もな、それで一悶着あったわけ。夫（おじいちゃん）と私（おばあちゃん）は絶対行く気がなかったんや。組織いうのが嫌いやったやん、夫（おじいちゃん）。朝鮮の人自体が嫌いなんや。姑（おばあさん）は組織にはまってな、もうバリバリなんや。それと喧嘩ばかりしてな。〔姑は〕「行こう」いうわけや。夫（おじいちゃん）と私（おばあちゃん）は「どんなことがあっても行かへん」言う。ほんならな、夫（おじいちゃん）が長男やろ。姑（おばあさん）は「長男が行けへんかったら、わしも行かへん」言うわけや。夫（おじいちゃん）が、「借金してでも行かしたるから、先行って、よかったらわしら後で行くから、先行け」言うても行かへんかったんや。

夫（おじいちゃん）のな、1番目の弟がものすご酒癖悪うて。酒飲んだら、もうキチガイみたいにするから、家中揃って「先にあれを行かす」いうて。本人（このこ）は「行きたない」いうて、高校卒業して田舎で働きに逃げに行ったんや。逃げて働きに行ったやつをな、本人が「嫌や」言うのを連れ戻して、「ええとこやから」いうて行かした。なんでいうたら、この子行かせへんかったら家の中ひっくり返ってまうねん。飲めへんかったらアホみたいにおとなしいの

にな、飲んだらキチガイやねん。行かすときに夫（おじいちゃん）が、「おまえが行って、もしよかったら『すぐ来い』と書け。もしあかんかったら『[末っ子の] T, 嫁さんもうて来い』いうて書け」いうて教えたんや。もう、秘密の国やから。いらんこと書かれへんから。「それやったら事情がわかるから」いうて行かしたら、3 ヶ月も経たんうちに「T, 嫁さんもうて来い」いうて手紙が来た。

北朝鮮に姉を訪ねる

私の〔3 番目の〕姉さんも〔北朝鮮に帰った〕。〔姉の一番〕下の子、Y が〔私の〕次女と近い年や。よちよち歩くときや。神戸まで見送りに行ったわ。〔帰国するまで、姉家族は〕よその二階を借りて住んどって、姉（おばちゃん）、安定所〔の失対〕へ行きよったやろ。義兄（おっちゃん）は日雇いであっち行ったりこっち行ったりして、一杯飲むやろ。横着やから、休んだりごねたり麻雀したり。そんなことやから生活できへんやん。ほんなら、〔北朝鮮は〕「天国や」「衣食住保障してくれる」。ほんで、「よその国で一生涯働いても無意味（あれ）や。行く」言うたやつを、止めたんや、母（おばあさん）が。「どんなことがあってもおまえは行くな」と。むこうの家族は男 3 人兄弟。姑もお義兄（にい）さんも義弟（おとうと）家族も、行く言うたんや。〔本来〕うちの母（おばあさん）はな、「結婚したら女は男のほうに尽くせ」いうアレやけど、あのとき〔姉を〕呼びつけてな、私（おかあちゃん）らおとこで言うたんや。「ひさちゃん、親やお義兄（にい）さんの家族、義弟（おとうと）の家族、みんなが『行く』言うたら、おまえが『嫌や』言われへん。言われへんねやったら『行く』言うて一緒にいていけ。その代わり、万景峰（マンギョンボン）〔号〕に乗ったらむこうの国やから、先に上の息子を連れて乗せ。上の息子 2 人はもう大きになつとうから、男やし、乗せ。そのかわり、下の Y を手放されへんねやったら、その子だけでも負うて、階段昇らんと『ちょっと、トイレ行ってくるわ』言うて、〔みんなが〕タラップを昇ったん見て、おまえは逃げて来い。おまえの面倒はわしらが見たる」いうて、そこまで言うたんや、あの厳しいお母さんが。「おまえ、行ったら今生の別れやで」言うたけどな、〔言われたとおりに〕せえへんかったんや。子どものためについて行ったんや。そら、かわいいて大きした子、どないして離れてくるん？「できへん」言うて、乗って行ってもうたんや。

〔日本にいるときは職業〕安定所〔の失対〕で働いとったら、姉ちゃん、〔むこうでの生活より〕ええ生活しよったやん。毎日、風呂行って。安定所に友達ができてやな、旅行も行ったりやで、しよったやん。——〔あのときは夫が稼いでへん人が北朝鮮へ〕行った。それと金持ち。すごいカネ持って、事業持って。京都からも、西陣織の、ものすごい金持ち、あの人ら機械持って、みな行ったんやで。行ってキチガイなって死んだ人とか、いらんことしゃべって隔離されて死んだ人とか、自殺した人がものすごい出たんや。ものすごい差別受けて。

ほいで、〔北朝鮮の姉から届く〕手紙いうのは「セメン〔ト袋の〕紙送れ」「ナイロン送れ」。「セメン紙？」いうて〔不思議に思っとったけど、私らが北朝鮮に〕行ってみてわかった。〔家が〕洞窟みたいな、そんなとこでな、石や砂利が入手不能（あれ）やから、セメン紙を張らな生まれへん。セメン紙は強いやろ？ そやさかい、ずっと手紙に〔書いて〕来とったんや。〔それぐらい〕なんにもないのにやな、ものすごい人を引き受けとうから。もう、ほんまに、

カネのない〔のに〕無理に行った人なんか……。日本円いうたらすごかったから。もうはっきり言って、日本円の10円やったら、むこう〔では〕何千円やん。それぐらい日本円はものすごい高価（あれ）やったからな。だから、おカネようけ持って行った人は、土地貰うて、自分らの日本円使うて家建ててするんやけど、カネのない人のほうが多いやん。まして、最初行くときは、ちゃんとした人あまり行かへんやん。青年帰国事業団があつて、それで行かした人いっぱいおるんやで。「子どもは〔国の〕宝や。〔国が〕世話してくれる」いうて。ほいで、単車事業団いうて、単車いっぱい乗ってな、ダーツとな、〔行った人を〕受け入れたりしとんや。でも、そういうような人、いっぱい受け入れずぎて、なんにもない国がどこに住まわすん？

ほんで、姉ちゃんの手紙にも、「ひろこ、結婚さして来い」いうて来た。「来るな」言う意味やん。ひろこがまだちっちゃかったのに、「結婚さして来い」言うても何年先や。

その前に1回、母親（おばあさん）が、金日成の招待で〔北朝鮮に〕ひとりで行ったんや。〔お母さんが北朝鮮に着いて〕船を降りたとき、齒の抜けてな、白髪の、真っ白な頭してな、百歳ぐらいのおばあさんがな、「お母さん！」言うて飛びこんできたから、「いやー、あんた知りません」いうて退けて、娘の顔を探したんやて。「いや、私や！」いうてな、〔その人が〕食らいついたんや。

「いや、知りません。あんたは間違うてます」いうて言うてな。ほんで、「ひさちゃん、どこ行ったんや？」って。ちょっと離れたところにな、婿がおったんやて。婿〔の顔〕は、いっぺんでわかったんやて。ほいで、「ひさちゃんどないしたんや？ ひさちゃんが見えへんやんか」言うたら、「ひさちゃん、これや」。「ええー！」いうて、お母さんな、2、3歩下がった言いよった。帰ってきて、「びっくりした」言いよったもん。

ほんで、母親（おばあさん）な、「おまえとわしはもう〔この世では〕会えへん」いうことで、帰ってきたんやて。帰ってきてな、寝込んだやん。死ぬ前に、布団のなかでな、泣きもって話したけどな。「なんとも、話しもようせんような国やった。あいつが、行くな言うたわしの手を振り切って行ったのに、どないするんや」いうて。「親の言うこと聞けへんかって行ったのに、どないも……。おまえとわしは今生の別れやいうて帰ってきた」。そやから、親の気持ち、すごかったと思うて。

ほんで、死ぬ3日か4日前に、私と真ん中の姉ちゃんが2人で、「お母ちゃん、姉ちゃんどこ行けるようなるやろか？」言うた。「おまえら、なんぼ行こう思うても行かれへんど。その代わり、わしが死んだら、自然と3年目に行くときが来る。そのとき行け」。なんの意味やわからへんかったんや。それがな、お母さんが死んでちょうど3年目、喪が明けて、その明るる年に、兄ちゃんと私が行くようになったんや。ほいで、船降りて、ぱっと着いた途端に、兄ちゃんにこっそり言うた。「兄ちゃん、タイムスリップした国に来たな」「おまえ、黙っとけ！」

こっから行ったら国が受け入れとうお客さんやから乗用車で送り迎えしてくれんねん。ほんで、バスはええバスや。観光バスみたいなバス、ものすごい総連が送とうからな。こっから行った人はそれに乗して、ずーっと行き先へ積んで行ってくれるんや。玄山（ヒョンサン）から平壤（ピョンヤン）までな。ええバスいっぱい送とうから、国のお客さんはそれで送り迎えやねん。そやか

らな、バスに乗って走りよったらな、ものすごいみな羨ましがるんや。助けにな、日本から来とんをな。

ほんで、姉ちゃん、平壤に呼んで、ご馳走して。「30年目にはじめて平壤へ来れた。おまえらが来うへんかったら来られへんかった」言いよったもん。自由に行かれへんからな。ほんで、そのとき、義兄（むこう）の母親（おばあさん）も行ったから、息子のために。訪問した人は、家族〔に会いたければ〕申請せな呼ばれへんねや。なんぼ目と鼻の先におっても、親が来たからいうて勝手に来られへんねや。申請しとったから、義兄（にい）さんと姉さんが来たんや。で、そこでな、姉ちゃんと兄ちゃんど百貨店買物（かいもん）行くときにな、ほんまに、買いきろかいうほど買うて、みんな荷物な、送ってな。〔北朝鮮の〕百貨店いうたら、日本から行った人とか日本円ようけ持とう人しか買われへんところやから、いろんなもんがあるやん。いろんなもんいうたって知れとうけどな。缶詰とかレトルトのカレーとかな、そんな常備食ものすごい買うて。ほいで、バナナなんか、食べられへんやん。バナナなんか金持ちしか食べへんやつや。〔姉ちゃんは〕「見たことない」言いよった。そのバナナを買い切ってやな、何箱も送ってな（笑い）。

〔母が北朝鮮へ行ったとき、姉さんは〕ものすごい、見られへん家におったらしいわ。「あんなン、人間の住む家か？」というような家を見てきたんや。ほんでな、「家を建て」いうて、おカネやってきとんや。そやから、コンクリでな、まあまあの家建てて。〔でも、まわりの他の〕人間の家な、昔の田舎の肥料溜める小屋よりひどいんやで。私、行って見てな、びっくりしたで。

家庭訪問の晩、布団被って〔外に聞こえへんように話したんや〕。みな監視（あれ）がついとうから、〔大きい声で〕しゃべったら聞こえる。いっぺんに連れて行かれるから。〔姉は小声で〕「いっさい言うたあかんで。着いた途端に、うわー、地獄へ来たって思った」言いよった。雨が降とったんやて、自分が降り立ったとき。バスがな、ぼろぼろのバスでな。ジャンジャカジャンジャカ雨が漏るんやけどな、コウモリ傘持とったらしいやん。「バスのなかでこないしてな、〔傘を〕子どもにかぶした」いうた。ほんでな、連れて行かれたンどこやいうたら、洞窟みたいな家なんや。急遽、穴を掘ったんちがう？人間が住めるように。

〔他にも〕いろいろ話したんや。まあ、世間話はええんや。いらんことさえ言わんかったら。ほんならな、姉ちゃんが「いついつの日に自分が寝とって朝5時ごろ目が覚めたんや」。夢のなかで目が覚めたんやな。「朝やったんや」と。ほいでな、パッと〔外へ〕出てな、東の空を見たんやて。ほんならな、空の彼方から、なんか黒いもんがダーッと降りてきようから、「何が来よんやろ？」いうて。ほんならな、1匹の龍が天から来よんやて。「龍がダーッと降りて来て、近くまで来た思うたら、カラスがな、尻尾に乗ってて、パッと自分の目の前で降りて、消えたんや」いうて。ほいで、「えっ？ なんのこと？ お母さんになにかあったんやろか、思うたんや」いうて。お母さんが朝8時15分に亡くなるその前の日、息があるときに姉ちゃんに会いに神さんと一緒に行っとうわけやねん。龍いうたら天の神さんや。尻尾にカラスいうのはな、天の神さんの使いのメンシン姉さんが、お母さんが死ぬいう知らせのために会いに行っとうんや、姉ちゃんに。夢のなかで、生きとうときに姉ちゃんに会いに行っとな、明るる日の朝8時に亡くなったんや。ほんなら、「その死んだ明るる日に、『ハ

ハシス』いうて電報が届いた」言いよったわ。ほいでな、「水、お供えて、お母さんの冥福祈ったんや」いうて。

あと2回行ったよ。2回目は、その明るる年行ったんや、新潟から。行くたんびに、もう、料理もあらへん。こっから訪問する訪問団〔に対して〕もやな、待遇がものすごい悪い。勝手に買うて勝手に食べいうやつや。国がだんだんだんだん困窮（こない）なる。前やったら、食べもんもちゃんと三度、気いつけて国から出してな、私ら食べよった。〔それが〕朝から晩までな、自分らで買うて、自分らで用意（つもり）して食べへんかったら食べられへんのや。ほったらかしや。ほんで、そのときな、汽車乗って帰ってきよんのにな、ある駅で止まったらな、「出発！」言うのにやな、タッタカタッタカ、汽車がな、後ろへ下がって行くン。平壤へ向かって行かなあかんのに。そんだけ電気がないから。兄ちゃんと弟と「兄貴、これ、汽車どないなとんや？」ダーッと後ろへ汽車が下がって。ほんでな、下がるだけ下がって、停まるやん。こんど、馬力でパーッとまた前へ進むやん。2, 3回くり返した。そんな国へ行つとったんやで。

2005年に帰化

2005年に、帰化やな。〔帰化して変わったことは〕選挙権得ただけや。〔選挙権は〕私は重要だと思えへん。得たから〔選挙に〕行っただけや。どんなもんか思うて、経験で行っただけやけどな。日本人になっても、やっぱり朝鮮人やいう意識はあるで。そらもう、それでこの年まで来たんやもん。〔でも〕もう、〔北にせよ南にせよ〕どっちの国に帰る気もさらさらない。日本で生まれて、日本の教育受けて、日本で生活して、この年まで来たから。ただ朝鮮人いう意識はあって。親からの受け継ぎがあるから。

韓国へこのあいだ行ってきたけど、韓国の土地踏んだら、もう、韓国も日本みたい。北朝鮮、最初行ったときはものすごい後進国、昔の、タイムスリップした国やいうことはひしひしと感じたけど、韓国はな、飛行場降り立ってもその感じあらへん。ただ、ああ、これが韓国かな、いうて見てまわったけど、感動はなかった。北朝鮮はすごい感動やったけどな。ごっつい、こんな国がまだあるんかいうような感動な。ほんで、わがきょうだいに会いに行とうもんやから。でも、まだ韓国も日本みたいに完全に整備されてへんからな。こういう道路のな、舗道なんかでも日本はきちっとしとうやん。やっぱり、ソウルの街でも雑（ざつ）い感じな。日本は見えるところはものすごい綺麗にするやん。田舎行くほど、素晴らしいやん。韓国はもう、一步田舎入ったら、ガタガタ道やからな。そういうあれがあるのと、もう、チョゴリ着て歩いとう人、誰もおらへんでな。日本のこころ歩いとう人みたいに、ジーパンと普通の服着て、タッタカ歩いとう。けど、なんとなく、ちょっと年いった人なんかは、ああ、やっぱり民族性が出とんな、思うわ。身のこなし、服の着方な。

住めば都で、日本で生まれて日本で育って、日本の教育受けて来たから、よっぽどの環境に置かれんかぎり、もう、「韓国へ〔帰ろう〕」いう気持ちはいっこもない。ただ、私のなかで、韓国人やったいうことはあるけどな。もう、これからは子どもの代は日本人やんか。

Living in Defiance of Male Chauvinism in Korean Resident Society in Japan: Interview with an Old Female Korean Japanese (Part II)

Sajik KIM, Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is the second part of an interview with a senior second-generation Korean resident woman in Japan. Sachiko Nakamura (pseudonym), the interviewee, was born in Osaka in 1935 (She was 74 years old at the time when this first interview was conducted). She was the fifth of nine siblings. When American air raids intensified during the Pacific War, her family had to move from Osaka, where they had been enjoying a stable life, to Himeji. Following the move, her father made a living on work from unemployment relief projects, while her mother became a mudang, a traditional Korean shaman.

Sachiko entered a Japanese public elementary school. She fought with her Japanese classmates, who verbally insulted her. The war ended when she was 10 years old, and she experienced liberation from Japanese colonialism. Quitting Japanese elementary school, she entered an ethnic Korean school with her brother three years her senior. Her family was poor. She dropped out of middle school in the third year after her parents told her that woman did not need to study. Instead, she learned dressmaking. Her three elder sisters all left the family after each was married at the age of 19.

Her brother, the eldest son in the family, attended a Japanese high school and university. Sachiko objected to her parents' attitude that "women were useless." Since her mother was busy with her job as a shaman, Sachiko had to take care of her brother until his marriage. In spite of these circumstances, Sachiko enjoyed her youth by attending dance halls and movie theaters. The third of her elder sisters went to North Korea with her husband's family during the "Return Home to North Korea" campaign.

When she was 21, Sachiko was married to a Korean resident man in a match arranged by her parents. Her husband launched several businesses, including a scrap metal dealership and a construction company, but nothing lasted long. Eventually the family's life settled down when Sachiko began to run a lunchbox shop with her daughter. In 2005 she obtained Japanese citizenship through naturalization.

Her life story, from the war years through to the postwar era, reveals plentiful examples of Japanese discrimination against Korean residents in Japanese society, as well as her struggle against male chauvinism

within the Korean residents' community.

Key words: Korean residents in Japan, male chauvinism, life story